

アポリアとしての〈正しき〉中国理解への道

——租界返還後の「大陸新報」掲載文学関連記事をめぐって——

大 橋 毅 彦

一、日本近代文学研究にとつての「大陸新報」の資料的価値

戦時下の上海で発行されていた邦字新聞「大陸新報」掲載の文学作品と文芸・文化界の動向を伝える記事からは、日本近代文学研究に資する数多くの情報を拾うことができる。

その輪郭を掻い摘んで記せば、第一に全集をはじめとするテキストでは、その存在自体や初出形態が知られてこなかった作品、あるいはこの時期の彼らの動きを伝える記事を見出すことによって、個々の文学者に関する伝記研究、書誌研究が推進できることがあげられる。すなわち、上海在留邦人コミュニティの文化的アイデンティティを支える上でのシンボルの存在でもあった内山完造が「大陸新報」に寄せたいわゆる漫文の類や、大陸新報社主催の座談会への彼の出席の度合いは相当数に上る。汪兆銘を首班とする南京国民政府宣伝部顧問として南京と上海の間を頻繁に行き来していた草野心平、「大陸新報」の姉妹紙的な役割を果たした華字紙「新申報」記者を経て現地発行の文学雑誌「上海文学」「亜細亜」に深く関わっていく、戦後は詩誌「日本未来派」を主宰していく池田克己、この両詩人の名前

も頻繁に現れる。

第二には、現在の私達が手にする戦時下の上海を舞台とする文学作品のアクチュアリティを担保する記事が見出せること。武田泰淳の『上海の螢』（中央公論社 一九七六・一二）が描く戦争末期の上海における宗主国日本の文化統治のありように対応する発言や記事が拾えたり、林京子の『ミッシェルの口紅』（中央公論社 一九八〇・一二）に登場する日本人少女の心を浮き立たせた外国映画（「風と共に去りぬ」）上映会開催を告げる記事も、「大陸新報」の片隅にたしかに掲載されている。

第三の効用としては、泰淳が就職した中日文化協会上海分会、池田が同人として加わっていた上海文学研究会をはじめとする、現地の文学者が所属していた文化機関や団体の活動の実態がつかめることも挙げられよう。また、中日文協上海分会事務所のすぐ近くにあったライシャムシアター（蘭心大戲院）のように、彼等がそこで上演された複数ジャンルの劇場芸術に接してこの都市が生み出した文化的混沌に衝撃を受けていったという、そうした〈場〉に関する記事も、広告欄に載ったものも含めて多数ある。

第四には、文学史上の出来事の実相を明らかにしていく上で、かなり重要な情報もキャッチできること。たとえば、一九四四年十一月の南京で行われた第三回大東亜文学者大会に注目して、その開催に至るまでの経緯を「大陸新報」紙面で追っていくと、当初大会は同年春の開催を予定していたが、中国文学協会設立大会がそれに代わって五月中旬に開かれる動きが生じ、無期延期となつてその開催が危ぶまれていた大東亜文学者大会が今秋開催と報じられたのは七月に入つてのことであり、一方、中国文学協会は結局成立せず、その代わりに中国文学年次会なるものが大東亜文学者大会の前日に開かれたことなどがわかる。

さらに、第五の特質として指摘したい事として、「大陸新報」に「よみもの」の一つとして掲載された重慶から脱

出した中国人の手記が、その少し後に改造社が刊行する月刊誌「大陸」に転載されたというような事実がある。大陸新報社と改造社のような内地の大手出版社との間に、中国の都市を市場とする出版戦略に関わってどんな連絡体制がとられていたのか、これもまた興味を惹かされる問題である。

けれども、「大陸新報」に載った文芸文化関連記事が示している、こうした多岐にわたる傾向についての全般的な紹介や解説は、すでに筆者が発表している拙稿⁽¹⁾を参照してもらうか、筆者も含む八人のメンバーが編んだ『新聞で見る戦時上海の文化総覧——「大陸新報」文芸文化記事細目』全三巻（ゆまに書房 二〇二一・五、一〇）の方に回すことにしたい。代わってこの小論では、一九三九年一月の創刊以降の紙面を追っていった時、一九四三年八月の租界返還のあたりから、それまでとは異なる傾向を見せていったと判断される文芸文化関連記事の言説配置の構図を前景化していく作業に重きをおきたい。

むろん、新聞という活字メディアに掲載される文芸記事である限りは多様なジャンルと多様な書き手が存在するわけだが、この日中外交史の上ではエポックメイキング的な出来事のあった頃から登場する新たな書き手を中心として繰り広げられる言説群が、彼一個の問題を超えてそれぞれのように切り結び、この時期の上海文化界のありようを考えさせるに足る発信力を持ち始めていくのか、そしてそれが「大陸新報」のいわゆる国策新聞ないし御用新聞的側面といかなる関係をとるのかといった問題についての見取り図を描きたいと思うのである。

二、「国民座右銘」の共有と「大陸新報」特有の言説配置の構図

「大陸新報」の創刊経緯や大陸新報社の陣容面で朝日新聞社の存在が大きく関与していたことについてはすでに山本武利が論じている⁽²⁾が、それをふまえて文芸文化関連記事が載った頁⁽³⁾の紙面構成を見ていくと、それが内地の一

般新聞の傾向をさほど逸脱していない性格をその一面で持っていたことが確かめられる。

つまり、時期によっては同じ頁に「中支縮刷版」と題して上海以外の華中各都市の動向を伝える記事が掲載されている⁽⁴⁾も、文芸文化関係記事の方は、「大陸俳壇」「大陸歌壇」といった投稿欄、「南船北馬」「豆評論」のようなタイトルを持つコラムや「新刊紹介（批評）」欄があり、そして連載小説もこれまた紙面の一郭を占め、さらに多様な書き手を登用しての随筆、評論、詩歌、紀行文、翻訳作品などが掲載されるというように、それぞれのジャンルの選択や作品配置のありようは、ほぼ一般紙の文芸欄（学芸欄）に準じるスタイルとなっている。連載小説の作者としては、草野心平・日比野士朗・多田裕計のように、第二次上海事変の戦闘に参加した経験があったり、現地文化の動向と深く関わる者も挙げられる⁽⁵⁾が、一方では片岡鉄兵・丹羽文雄・高見順等、内地における流行作家も起用して、読者の期待や関心を引きつけていく⁽⁶⁾とする配慮も見えてとれる。

また、日本文学報国会が一九四三年度中に行った主な事業の一つである「国民座右銘」の選定を受けて、大阪版「朝日新聞」では「本是れ神州清潔の民 伴林光平」（解説・保田與重郎）を皮切りにして同年一〇月一日からその連載が開始されるのだが、「大陸新報」の側でもその連載が一九四三年二月一日から始まっているのだ。一日一句のかわりで載る座右銘の出てくる順序が両紙の間では必ずしも一致しておらず、またその解説者も異なっている⁽⁷⁾のだが、これもまた同紙が「朝日新聞」の企画を引き継いで、いわゆる決戦（総力戦）体制の論調を作り出していることの例証となろう【図版1】。

とはいえ、上海には上海ならではの決戦体制作りも要請されていた。租界返還のあった一九四三年八月に発足した華中興亜報国会⁽⁸⁾の要の位置を占める上海興亜報国会は、現地総力戦体制を確立することを目指して、毎月の実践項目なるものを上海在留邦人に呼びかけていくのだが、たとえば同年一月の項目の一つとして打ち出す「中国および

貫く日本精神・三百六十六句

皇是 日本文學藝術會 青島支部・第六期日新學社
 日までの節目に照てられて三百六十日満了された、これは日本文學藝術會が定めて、期間満了を認めて、本社が協力して完成したものである

[illegible]

十月一日 本是れ神州清潔の民
伴 林 光 平

[illegible]

續修網羅(説詞集、如今聖
神休戦、本島州海軍兵士)と
ちつたもので、光平軍艦の
時の志を述べたものだが、
風のうちに如くたる林檎を
をひそめ、一行よく州の
の生命の本願を吐露したもの
といへよう。(保田西鶴氏)

樹下石上、草衣木食、滴水寸土

朝服に非ざるはなし 宏 聲 麗

京都西宮の正徳寺の開山、又々二年、年の御に過る
ずはふさふとしたの國境がたがひたしたまに、本
配江の谷にも「黒石上」「京木無」「雪句があ
「川野無」を、漢、土語を添へてやむ。木の葉は
流る水とて、漢、土語を添へてやむ。木の葉は
も、之を天子の國でなにもは、は、の意味であ
す。子寶句も「百天之下、百土之族、王土に起るべし
とある。一層似たもの、漢語を添へたもの（第二）漢

「朝日新聞」(大阪版)で一九四三年一〇月一日から掲載が始まった「けふの国民座右銘」(写真右)と、「大陸新版」では一九四三年一二月一日から始まる「けふの座右銘」(写真左)。

中国人を理解致しませう」は、その集約的表現の一つであろう。すなわち、こういったスローガンと対応して日中文化の合作や交流を図る動きが、同年一〇月の中日文化協会上海分会の改組だとか、それ以前は邦画専門館であった虹口の映画館で中国映画が字幕付きで上映される運びとなる⁽⁹⁾というようにして生じていき、かつまた、そのことを反映した紙面づくりが「大陸新報」紙上で行われていくのだが、その過程で一つの特徴的な現れとなってくるのが、上海を中心とする中国文学の現実態を具体的に紹介、批評していく記事の増加だった。日本側が中国文学の現在のありようをよく知りもせず形式的に文学交流を唱えても、それによって生じるのは真の「交流」ではなく一方的な伝達あるいは「直流」に過ぎなくなる、ならばそのようなお題目を並べ立てるのではなく、個々の作品に実際に触れてみてそこに流れる中国人の民族感情の理解に努めていこうというわけだ。そして、こうしたスタンスをとった書き手たちの中で急先鋒の役を演じたのが島田政雄という存在だった。

三、民族文学確立への呼び声——島田政雄の「大陸文化評」——

かつてプロレタリア作家同盟機関誌「戦旗」社の鳥取支局設立に関わり、治安維持法違反で検挙され鳥取刑務所で服役、獄中で転向して釈放された後、一九三八年に中国に渡って職を転々とした島田政雄は、同郷の友人で大陸新報社にいた竹本節のひきで、すでに一九四一年には「志摩」のペンネームを用いて「大陸新報」のコラム欄「南船北馬」にしばしば文章を寄せている⁽¹⁰⁾。だが、ここで注目したいのは、一九四三年暮れから四四年三月はじめにかけて、これもまた竹本の依頼で、しかし今度は本名で、彼のために新たに設けられたともいえる「大陸文化評」と題するコラム欄を中心として盛んに筆を揮っていった折の評論⁽¹¹⁾である。

さて、この一連の文化評の中で島田政雄は、いわゆる有閑文学の蔓延や「文化飯」⁽¹²⁾にありつく者の増大によって

窒息しかけている上海の文学界に対抗すべく現れてきたと判断する事象を具体的に引き上げていく。いくつかの事例を挙げるなら、『糞』その他（一九四三・一二・二二）では、その手の類の作品に接しているも「ウンザリさせられ」ていた「鴛鴦胡蝶もの」とは一線を劃した小説として、丁諦作「糞」と「覆舟」や、蘆焚作「期待」などを取り上げ、「副刊の性格」（同・一二・二五）では、「申報」の副刊「白茅」が、「教師、店員、工人、学生等無名作家」の投稿によって「息苦しいほど濃厚に生活現実を反映してゐる」ことに注目、「文潮」の出現（同・一二・三二）では、「文潮」の主編で十七歳の馬博良が執筆する「毎月小説評介」を「文学批評の困難なこの地において、敢然と筆を取ったのみならずその批評は概ね公平且つ妥当であり」云々と高く評価する、というようにだ【図版2】。

こうした一連の発言から読みとれる、島田が作品の書き手及び日本人の読者も含めたその享受者に対して望んでいたことは、時代の試練に曝されながらも、彼らが歩んできた何千年来の歴史の上に新たな一ページを切り開こうとしている中国人の民族感情をマークせよ、ということだった。そこに描かれた人間の生息がどれだけ時代の息吹きに触れているか、そこでの人間の魂の掘り下げがどれだけ民族の歴史的現実という鉅脈を掘りあてているか、そういった観点から島田は魯迅再評価の弁を揮いもすれば⁽¹³⁾、その一方では人生の暗黒面の捉え方がグロテスク趣味や詠嘆口調に流されている作品、読み手の興味にもたれかかって性をめぐる心理をとりとめもなく綴っているだけの作品だと判断したものに對しては批判を浴びせかけ⁽¹⁴⁾、かつまたそんな作品に発表の場を提供する出版社に對しても、その編集方針の無定見さを疑う言葉も発していくのである⁽¹⁵⁾。

このように中国人の民族感情をそれ自体として理解しようとする論調を持つ記事は、扱う対象が文学周囲のジャンルにわたる場合においても散見せられる。たとえば、中華電影聯合股份有限公司の国際合作処に所属していた辻久一は、「大陸新報」に寄せた評論「秋海棠」（一九四四・二・一五）で、前年大光明大戲院を満席にした映画「秋海棠」（監

評化文陸大

街頭書店

島田政雄

評化文

人は徳義の文化繁り立つ
たらよ、徳義の別物
として、十萬圓かの月
又又は半月を賜ふ、夫
夫特許金以て、一生
貴に、此文化の面手益つて
いふ願望である。一服の生煎原
原が五十元から五十元、それを
十元前後の足額金つけて辛うじて
勢力に際しようとしてゐる。紙
の特別給や、特選金、金ル
ルト

だれに於ては、土俗の出版は漢は成
 立しない。千字文が動かないかと
 云ふ。一、千字文五元、印刷
 三元、風で、一千五百元、印刷
 五元、これである。見やう、かう
 して上流の文化が維持されてゐる
 これらの雑誌に對して、財政的な
 ことは、政治が一切助へず、
 批評が一切避けてゐることだ、
 今代表のものを舉げて見ると、
 「雑誌」「又文藝春秋」が政
 治部所を破き去つたようなもの
 「風潮報」は、純文學雑誌が極
 交が主「新潮」に似てゐる「万
 葉」「シジツ」と又「文藝」を
 混合したようなもの、四國に

「天地」「天下」「文友」「女
書」四つとも『源氏物語』の
体裁・内容が天々異なり、即ち二
は散文、三は筆を主とした商人雑
形など、四は漢かによりのこんど
裏附である。たゞの集定問題に
留められてある。「文友」は源氏
目録の條分であり、「女書」は左馬
女郎番心組の綴箋で、婦人一般
の交友を混合したような本體が新
しうられ、なんくん小娘の口にな
り込んでゐる。「小説月夜」は
源氏傳説部に類する、通俗小説風
かりで。

【図版2】

「大陸文化評」の一回目として掲載された「街頭書店」（大陸新報）一九四三・一二・二〇と、民族文学論争の端緒になっていくとも言える「中国文化は一つ」（大陸新報）同・一二・二四）。

中國文化は一つ

島田 政雄

評化文陸大

大文化文評

國民民族に「理想ない像」に
國民民族の「二系統」はな
い。前記の「派」とは和平
派だとかこの國の文化を
分けて見るのは間違
である。重慶だとか桂
林だとか上海だとか、その土地の
政治のあり方に左右されて、多少
の隔った表現の仕方をとつてゐる
だけで、根本は「元ある」。上海
の文化界それ自体をそのことを證
明してゐる。例へば上海のどの報
の對立を示して見るものもなく
ば、非常な過激の感觸を以つ

て、**内地の文化を照つてゐる。**

「『萬葉』の文化報道」春秋社の「文化報道と彫刻的思惑」などの雑誌は毎月重慶、桂林、西安等の各地にある文化人の消息や文化情勢を載しげに紹介されず報道してゐる。「『萬葉』の書寫動向」の如く、奥地に対する作家を「一家人」として扱つてゐる。更にこれ等の作家的作品自体を非常に優遇してゐる、例へば「万葉」の新年の豫言には先づ別注者の「手記」氷心の散文、老翁の隨文、璽子樹の「萬山通紙」等を附ける。これ等の人々の作品をこの様に扱つてゐることから中國文化の切つても切れぬ同じ日本の流れを感じるのである。中國の流れは一つであつた筈は國策の統一と革命の完成、新發達への實現を欲する文化である。

大陸歌謡 杭州 三浦桂樹選
北四川路 欠畑 哲子 杉本 源子
故郷に歸還おきて秋かな今朝朝
くの白くけに斯く

昭和十一年の十月の號より、從前まで描いて入るものが膝の下で

督・馬徐維邦）の中に出てくる、洪水によって田地が流されるのを目にした主人公が慟哭する姿を捉えて、そこに「メロドラマ以上のもの」、「代表的な中国的なものの一つ」（『中国のほひ』）が感じられると述べる。また、東京朝日新聞社東亜部から上海特派員として一九四二年秋に来滬していた須田禎一は、同地で親交を結んだ大陸新報社社員小森武のひき⁽⁹⁶⁾で主に「清川草介」の筆名⁽⁹⁷⁾を用いて、旧フランス租界の金都戲院や蘭心大戲院で上演されたり、はたまた上演の予定が取りやめになった話劇の動向に注目した文章を一九四三年一〇月以降発表していく。曹禺の「雷雨」や「蛻変」、巴金（曹禺脚色）の「家」、呉祖光脚本・張善琨演出の「文天祥」に言及したものがそれにあたるが、これらの劇評を通じて須田が心を寄せているのも、蟬が殻を脱ぎ毛虫が蝶になるように「古い中国」が「新しい中国」に生まれ変わろうとしている局面であり⁽⁹⁸⁾、「文天祥は死すとも中華民族は亡びず」のセリフに対して中国人の観衆が満場の拍手を贈る光景が示すところの「愛国心」（「民族精神」）の発露である⁽⁹⁹⁾のだ。

一口に日中の文化交流、合作といっても、その前提としてまず必要なのは上海を通して中国の文化運動の現実に目を向けること、そこで生起しているさまざまな動きを掬いあげていくこと、つづめていえば中国の「複雑さ」を理解すること——島田・辻・須田に共通する立場はおそらくそのようなものであった。したがって彼等は、大東亜文学者大会に向けての人選が、現地文壇で生じている新たな潮流を等閑視したままで行われようとしていることや、「アジア復興」の名の下に、いわゆる「礼教」なるものがその負の遺産を止揚されないまま文化統治の手段となりつつあることに対して異を唱える⁽¹⁰⁰⁾。日本とは異なる歴史を歩んできた「中国のほひ」を強調しようとして「必要以上のエキゾチズム（異国趣味）」の罠にはまる、あるいは満場の中国民衆とともに中華民族の不屈の精神を謳わんとしたために憲兵隊からの叱責が大陸新報社を通じて浴びせられたというように、自らの内と外面にわたってのリスクと向き合いながらこれらの書き手たちが行っていた言説活動に対しては一定の高い評価を与えてもいいだろう。島田

の積極的な紹介が功を奏したのだろうか、先に取り上げた丁諦作「覆舟」(『文友』一九四三年一月一日)と蘆焚作「期待」(『万象』同一年一月)は、神谷賛⁽²¹⁾の訳によって現地日本語雑誌「大陸往来」の一九四四年四月号と六月号にそれぞれ掲載された。

四、上海文学研究会同人たちの異議申し立て

上海における中国文学の新たな動きを紹介しようとして積極的に筆をとる島田の姿勢は、一九四四年元旦から五日まで四回にわたって「大陸新報」に掲載された大陸新報社主催座談会「中国文化を語る」に彼とともに出席した小説家の阿部知二⁽²²⁾や中日文化協会上海分会業務処長高橋良三⁽²³⁾の発言などを後ろ盾として、周囲からも認められるところとなっていく。その過程で島田は、自分が積極的に評価する新文学創造の動きを民族文学確立といった概念で包摂し、上海で生まれつつあるそうした文学が他の地域——南京、重慶、桂林、西安——でも同様に育つことを夢見て、「中国文化は一つ」⁽²⁴⁾という声を挙げた。

ところが、島田のこの主張が波紋を広げ、「大陸新報」紙面に一つの対抗的言説群が出現してくる。その代表格が池田克己「如何にして民族文学は可能なりや」(一九四四・二・二八)であろう。池田は、「大陸文化評」中国文化は一つ」と同じ趣旨の評論「民族文学の確立」(『大陸新報』一九四四・一・一〇―一二)の中で島田が口にした、「抗戦だとか、和平だとか、重慶だとか、南京だとかは政治の行きがかりの上には存在してゐるかも知れないけれども、新しい民族の文学の上には、そんなものはや過去のものとなつた歴史の階段に過ぎない」という言葉に現れる認識概念が、国家志向によって編成統一されたものとして民族を捉える立場から見れば曖昧であるとする。また、島田が「中国文化は一つ」において、上海の雑誌が奥地抗戦区の作家の作品を載せていることを自説の論拠としていること

に対しても、それが「中国文化の一時的混沌」の反映としてしか見えてこない自分からすれば、そうした島田の観察眼は一種の現象主義に巻き込まれた卑俗性を露呈しているだけだとも批判する。そして、こうした批判と併せて「私ばかりかへし強調する、中国の民族文学は、あくまで和平建国の志向と共にあることによつてのみ成立し得るものであることを」という主張を繰り出していくのである。

ここで池田がその発足時以来関わっている上海文学研究会の性格と、同会の機関誌「上海文学」の動向について一瞥しておくことも無駄ではあるまい。すなわち、同研究会は一九四三年四月に「文学による報国の真を身を以て実践する」⁽²⁵⁾ことを目的として設立された「上海唯一の日本人側文学研究団体」⁽²⁶⁾であるが、この報国実践を謳う姿勢は四年に入るとさらに強まり、同年四月刊行の通算第三号にあたる「上海文学 冬・春作品」からは「皇国民としての摂理を念ず」る同人たちの「己の内につらなる混沌を薙ぎ払はんとする悲願」⁽²⁷⁾を託した「筆心剣心」欄が設けられ、翌月の第三九回海軍記念日には、池田をはじめとする研究会同人による「文芸講演と詩の朗読の夕」が催されたりする。そうした傾向は、朝島雨之助「こゝろざし」(一九四四・一・一九)、黒木清次「述志の詩風」(同・一・二五、二六)、猛田章(武田芳二)「(皇国評論) 神国を自覚しよう みそぎの復活」(同・四・一九)など、池田の文章と相前後して「大陸新報」に載った他の同人の評論や詩によっても確かめられる。

上海文学研究会同人たちは、文学に挺身する自分たちの姿がいつしか中国作家に良い影響を与え、それによつて「解説ぬきの文学交流」⁽²⁸⁾が生じることを期待している。しかし、こうした物言いがすでに暗示しているように、中日文化を双方とも自立したものととして等しく受けとめていくことよりも、「皇国」日本の精神文化に絶大の信頼をおくことに心を傾けていく人々は、自分たちの価値観に包摂できない異質なものと出会った時、それを否定する言葉を口に出さずにはおられなくなる。朝島雨之助の評論「血だらけ秋海棠」(一九四四・二・八)がそのいい例だ。すなわち、

朝島はこの中国映画から受けた感銘は「もやもやとした後味の悪いもの」ばかりであり、そこに盛られた〈血〉のイメージが「凜然たる生命の血」ではなく、「中国の濁つた血の代表」として感じられたと述べる。辻久一が「秋海棠」を観て心を打たれたことについては先述したし、島田政雄も「大陸文化評」秋海棠（一九四四・一・一五）において、この映画からは「内乱と飢饉に苦しみつづけた三千年の歴史的民族感情」が汲み取れると述べていたが、辻と島田が肯定的な評価を下す論拠となるものを、朝島は「烈々たる日本人」のイメージと「神国日本」の「美しき伝統」を後ろ盾として真っ向から否定しているのである。

こうしたタイプの映画評は、日本映画「虎彦龍彦」の中に見出した「沈静の美」をもつて「秋海棠」を監督した馬徐維邦に苦言を呈していく梓雲平の「映画に就て」（一九四四・二・一五）でも確かめられるが、先に名を挙げた同人たちに、この梓雲平や詩「神話」（同・一・一九）、「千萬年に吾は在る」（同・四・二二）を書いた兼松信夫も加えると、この一九四四年前半という時期の「大陸新報」紙上に上海文学研究会会員の作品が集中している事実が改めて注目されてこよう。大陸新報社の年次報告書『大陸年鑑 昭和二十年／民国卅四年版』（大陸新報社 一九四四・一二）は、一九四四年度の上海の文学動向を振り返るにあたって上海文学研究会の活動をいの一歩に取り上げている³⁹が、両者の間にはかなり緊密なつながりが存在していたと思われる。島田政雄や須田禎一の文章を引立てようとするのが竹本節、小森武といった大陸新報記者であり、一方、池田克己もまた大陸新報社員であった点から見ると、記者たちの立場が一枚岩的なものでなかったことは確かだが、そうした個々の人間関係や考え方の相違といった次元とは別に、組織（集団・機関）と組織との間における利害の一致が上海文化界の帰趨に一定程度以上の影響を及ぼしていく出来事として、大陸新報社と上海文学研究会との連携をおさえておく必要があると思う⁴⁰。現に「上海文学」は、一九四四年四月刊行の「上海文学・冬春作品」から、「経営の一切が大陸新報社に移されることになり研究会は作品の

創作と編輯に専念することにな⁽³¹⁾った。すなわち、同誌奥付には発行所として上海黃浦灘路一七の大陸新報社名、発行兼編輯人としては大陸新報社編集部の水清投鬼の名前がそれぞれ記されることとなる⁽³²⁾。また、すでに言及した五月の海軍記念日に上海文学研究会が開催した「文芸講演と詩の朗読の夕」も、支那方面艦隊報道部とともに大陸新報社の後援によるものであった。

五、政治を無効化させる「私」性——室伏クララの立ち位置——

島田政雄に対する池田克己の異議申し立ての一月ほど前には、彼の魯迅評価をめぐるの陶晶孫や章克標からの批判とそれに対する島田の反論⁽³³⁾もあって、それら一連のやりとりは島田・池田の応酬も含めて民族文学論争と呼び得るほどの様相を呈していたのだが、その収束のありようはどんなものだったか。

論争に一区切りつける意味合いのあった、「民族文学の内容と形式」という副題を付けて一九四四年三月八、九、十一日の三日間にわたって「大陸新報」紙上に掲載された島田の評論「民族文学の確立」中には、先に自らが発した和平と抗戦、あるいは南京と重慶との対立を取り払ったかのような物言い、「民族文学の現存する政治性の否定の如く一部の方々に誤解されたこと」に対して「深く遺憾の意を表」し、改めて「私はこの南京、上海地区及びそこに存立する政治力」こそ「全支的民族運動の発祥地となり原動力とならんことを切実に希求する」といった言葉が記されている。それが島田の本音であったか擬装であったかについては、そうはいけいには判断を下せない。ただ、島田が注目する、南京、上海地区で生じている新たな民族運動（民族文学）を求めようとする動きと、池田克己が志向した「和平建国」の思想に貫かれたものとを比べた時、その強度の点においてまで両者の説が一致してしまっているとは言いい切れないとしても⁽³⁴⁾、少なくともここでの島田の言説は、こうした物言いに加えて『民族文学』の政治性を

激しく述」べ、「民族性なき文学は大東亜文学たり得ない」といった言葉も重なることによって、日本の唱道する大アジア解放運動と中国民衆の民族精神とが結び付いてこそ新生中国は誕生するという思想の枠内に、結果的には危うく嵌まりつつあると言えよう。総力戦下における日中の文学交流が問題になる時、このように文学が政治性（政治力）を持つことにいきおい発想の根をおいた言説によって、はたして新聞の紙面全体は覆われていくのだろうか。

島田の記憶によれば、彼が治安維持法違反の被疑者として検挙されたのは一九四四年五月四日だった⁹⁶が、その一月ほど前からの「大陸新報」紙上では、ここまで見てきたような評論ジャンルでの意見のやりとりを通じてだけではないかたちで、中国文学の現況を知らせる記事が増え始めていた。つまり、「国民座右銘」は引き続き毎日掲載され、島田が縦横無尽に筆を揮った「大陸文化評」はなくなつてその代わりに「文化直言」、「皇国評論」といった名称のコラム記事が置かれるようになったのと同じ頁（第四面）に、「中国文学紹介」、「中国文学」、「中国評論紹介」、「中国評論」という見出しのもと、中国人文学者による小説や評論が、幾人かの日本人の翻訳によつて掲載される回数が多くなつていくのである。予且の小説「阿富さんの事」（神谷賛訳 一九四四・三・二八―四・二二）、陶亢徳の評論「貧乏立国論」（仮谷太郎訳 同・四・二二）、佩凡の小説「面子物語」（岸杏女訳 同・四・六）、蘆焚の小説「郵便やさん」（室伏クララ訳 同・四・一四）などがそれである。周辺の雑誌メディアとの関連で見ると、中国人作家の作品をコンスタントに訳載していた現地日本語雑誌「大陸往来」の動きに刺激されるかのように、その一方では、日本人の書き手が発信するものを中国語に翻訳して中国人のもとに送り届けようとする中日文化協会上海分会の華文雑誌「文協」のありようとは、いわば文化の双方向的な流れを形成するかのようになり、さらに同紙の紙面構成の点から見れば、一九四四年二月以降「今日の芸能欄」中に「本日の中国映画は」というクレジットを掲げて載りだした、大光明大戲院をはじめとする市内の映画館⁹⁷で上映される中国映画に関する三行広告とも相呼応するかのようになり、これらの小説や評論が初出の

新聞や雑誌、あるいは初収本から日本語に訳されて転載されていくのだが、その中の一つで「天地」第五期（一九四四・二）所載のものを室伏クララが訳した、張愛玲の「燼餘録」（一九四四・六・二〇～二八）をここでは取り上げてみたいと思うのだ。

というのも、アジア太平洋戦争開戦による香港陥落前後の自身も含めた中国人の学生たちの動静を伝える、この作品の語り手である「私」の感懐が、この戦争を契機として中国が生まれかわるとともに〈大東亜〉が解放されていくことを夢見る精神に対してはまったくの没交渉の体をなしている、あるいはそうした心性を育んでいこうとする言説に対して冷水を浴びせかけているからである。そんな作品を日本の占領政策の続く上海で発表した張愛玲、そしてこの原文の味わいを殺ぐことなく日本語に置き換えている、彼女もまたある意味で有為転変の青春を過ごしてきた室伏クララ、——国を違えるこの二人の同世代の女性に注目し、彼女らが戦争の不条理性によって傷つけられた崩壊感覚なるものを共有していることを論じたのは藤井省三³⁷⁾だが、ここではそのように彼女らの内面に目を向けることに加えて、次に挙げるような「燼餘録」の叙述が、〈文学の民族性〉や〈文学の政治性〉という発想を前提として繰り出されてきた「大陸新報」紙上の言説——その中には室伏クララが「燼餘録」とは別に訳出した哲非³⁸⁾の評論「民族主義文学論」（一九四四・五・九～一二）も含まれよう——に対して抗争的な性格を露わにしていく点をとくに問題にしたい。

私には歴史を書きたいといふやうな望みはないし、歴史学者の取るべき態度については彼と評論する資格もないけれど、自分ひとりのきもちとしては、さういふひとたちがもつとどうでもいい、やうな話を聴かせてくれればいい、のには思はずにはゐられない。現実などといふものには系統なんかありはしない。七つも八つもの蓄音機がいちどきに歌ひだしたみたいに、めいめい勝手な唄を歌ってゐるのががちやがちやに■り合つた世界を作つてゐる。

一意、一心、一体、一元、一丸——「聖戦」を完遂しようとする側からすれば、こうした掛け声を発して、自らの支配下に置こうとする人たちを総力戦体制といった一つの秩序（系統）の下に組み込むことが、何よりもまして優先されることであつたし、政治的にそれとは違う立場をとる者であっても、ことが民族の文学の正統性や本質をどう規定するかといった議論に立ち至れば、いきおい一つの決然たる思考スタイルを示さなければならなくなる。

だが、自分を圍繞するものとの間にそのような「きつぱり」した関係を打ち立てるといったことは、「現実などといふものには系統なんかありはしない」と思っている「私」の眼には、自分の生の指針としては映じてこない。「人生の所謂『生きがひ』とはまつたくどうでもいい、やうなところに存在してゐるものである」と考える「私」が守ろうとするのは、「生死の境を出入し、最も色彩に富んだ経験のなかに浮き沈みしてゐても、私達はやはり私達で、一塵にも染まず、平素の生活のしきたりを維持してゐる姿なのだ。砲弾が飛び交う中でも自分のお気に入りの服をとりまとめることは忘れず、臨時看護婦の自分を何度も苦しげに呼ぶ患者の声を耳にしながらも、自分の飲料用の牛乳を沸かしていて、藍色の石炭ガスの焰の中に納まって「しんと光つて美し」い銅鍋の前から動こうともしない、——「私」やその友人たちがとつていくこうした身勝手な行為、と同時にそれらは「何かしようと思つたら、すぐやれ、何でも間に合はなくなつてしまふかも知れない（略）『人』なんて最もあてにならないものである」といった空虚や孤独感に裏打ちされた行為は、戦争を継続するためにはそのような心性を弱性のものとして排除し、人間の考えや行動をある種の鑄型に嵌め込むことを目的として用意される論理の形成基盤を突き刺す一つの棘なのである。

このような〈私〉性の擁護の側に立つ言葉、それは彼女が訳した「燼餘録」というテキストから離れて室伏クララ自身の創作活動に引きつけて見た場合、川鍋東策が彼女の作つたそれとして言及している「私の骨が机に向つているそのかたち」といったユニークな詩のタイトル⁽⁹⁹⁾や、戦後彼女の遺品の中から発見された小説のタイトル、すなわち

「あきこはあきこひとりの死を死ぬ」(「青年」一九四八・五)のトーンなどに引き継がれているし、さらに戦時上海を舞台とする作品の発表媒体を内地発行の雑誌にまで広げて探っていくならば、「政治家でも新聞記者でもな」い、「結論をほしがらない心」を持つ「私」を語り手とする短編「上海二世」をはじめとして、揚子江流域で展開される東亜新秩序建設のための「強力な統制」の動きからはじきだされて落ち目に向かう日本人の小商人の姿を描いた「邦人商社」にいたるまでの作品を「三田文学」誌上に発表していく、池田みち子という女性作家の存在も浮上してくる⁽⁴⁰⁾。だが、それはまた別の話である。いまは、大東亜の夢の実現、そのための文化面での日中の相互理解を企図して「中国文学紹介」の欄を設けた「大陸新報」紙上に、そうした壮大な企図に対して背を向ける言説も供給されていたことを指摘すれば事足りよう。

六、星野芳樹と林広吉が語りだすもの

中国ならびに中国人理解のために「大陸新報」が用意した仕掛けは、彼等が書きたいわゆる文学作品の紹介にとどまるものではない。日々くり返される生活の中にあつて生身の中国人と頻繁に接する人物からの身辺雑記風な文章も含んだ発信も掲載される。もちろん、こういった視点に立つ第一の書き手といえば内山完造なのだが、租界返還後の現地総力戦体制確立のために中国との提携がさかんに喧伝される時期に的を絞った時、そこには「大陸新報」創刊当初からの常連だった内山とは別に、そうした状況との関わりにおいて検証を要する人物もいるのである。星野芳樹と林広吉、この二人の名を挙げたい。二人とも一面においては公的な日中文化交流事業に関与しながら、その事業に寄せられる期待の地平からはみでた言説を残しているのである。

満洲国総務長官星野直樹の弟でもある星野芳樹は、非合法活動に参加したために逮捕拘留されていた豊多摩刑務所

を出所して妻とともに一九四〇年春に上海に渡って上海自然科学研究所の助手となるが、その後虹口に隣接する西楊樹浦の唐山路に夜学校を開設したのを皮切りとして、主に中国人児童を対象とする日本語教育に乗り出していった。同地区内の公平路を経て東熙華徳路に移転する頃にはその規模も拡大し、校名も容海中学校と改めた学校の責任者となっていた星野は、一九四四年三月には「日華親善の具現に貢献せる在華邦人」の一人として在華日本大使館から表彰状を授与されている⁽⁴¹⁾。こうした「日華親善の尖兵」的な存在を現地新聞メディアが使わない手はない。「大陸新報」には、すでにその前年にも、容海語学校で行われた日語劇学会を取り上げて、それを日華提携の理想的な姿であると謳った記事が登載されていた⁽⁴²⁾が、それからほぼ一年後のこのセレモニーの前後においても、星野自身が書いた「中国人の子弟と共に」と「胡吉士さんの話―中国人教師かたぎ(上)」・「李企伊さんの話―中国人教師かたぎ(下)」と題する随筆が、それぞれ二月一七日から一九日にかけてと、三月二五日・二七日の紙面に掲載された。

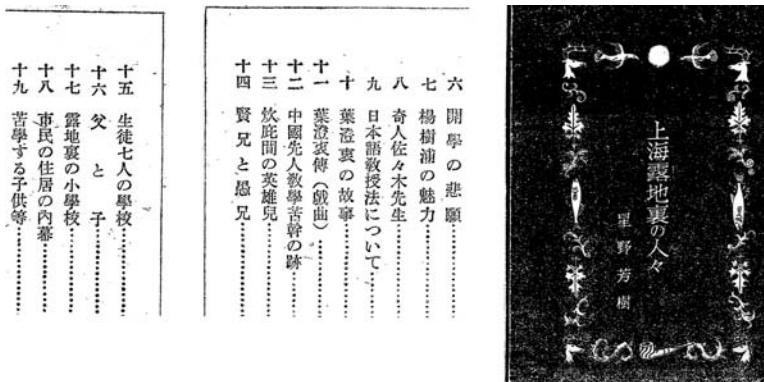
ところで、いま、これらの文章を一読して気づかされるのは、そこでは等身大の中国人の姿が語られているということだ。西楊樹浦のあちこちの露地裏からこの学校に通ってくる子供たちの、自らが新入生募集の広告貼りをして集めた「小朋友」を何くれとなく世話したり、インフレの亢進で学費より高くつくようになった食費を捻出しようと朝早くからパンの配達に出かけたりする様子が生き生きと紹介されている。あるいはまた、市立小学校の校長職にあってもそんなことには頓着せずに、校舎に使っている家屋の一番小さい亭子間を寝部屋として一日中子どもたちを相手に余念のない胡吉士さんの人となりや、上海郊外の郷紳で子や孫を相手に悠々自適の暮らしに入ってもよい身分なのに、「孤身飄々」上海に出てきて仕者をしのご元氣さで講義を行う李企伊さんの姿も、ほぼ同様のトーンで語られている。

こんなふうにして語られた彼らの風貌姿勢は、愈玉書という児童の父親が体現している「西楊樹浦の典型的な苦幹

成功者」としてのそれも加えて、六年間に及ぶ上海生活の回想記として戦後までもなく刊行された『上海露地裏の人々』（世界社 一九四七・一一）の中にも取り込まれていくのだが、そこで示される中国人たちに向けられた星野の視線もやはり低い【図版3】。そして、そんな視線に支えられた彼が「私等との間の人種的境界等は全く忘れさせて了ふ」といった感懷を「大陸新報」に寄せた文章中に書きつけた時⁽⁴³⁾、それはその前書きとして同紙記者が紹介する「自ら教壇に立つて友邦第二国民の教育練成に粉骨碎身して居られ」（傍点大橋）⁽⁴⁴⁾る星野芳樹像との間に亀裂を走らせるのである⁽⁴⁵⁾。

一方、信濃毎日新聞社時代の上司であった風見章との縁で、近衛内閣のブレントラストの役割を果たした昭和研究会に参加した後上海に渡った林広吉の場合も、上海市政研究会事務局長を経て、中日文化協会上海分会の改組に際しては同分会の常務理事及び事務局参与の任に就くなど、ある意味では星野以上に租界還付前後の上海市政、文化行政の表舞台に名前の挙がってくる人物である。彼のそうした立ち位置を「大陸新報」の記事で確かめるなら、同社主催座談会「租界還付と今後の上海」（一九四三・七・六）^(一一)の司会役を務めたり、「中日文協改組に際して 吾々の仕事」（一九四三・一

アポリアとしての〈正しき〉中国理解への道



【図版3】『上海露地裏の人々』表紙と目次の一部。「十四 賢兄と愚兄」や「十九 苦学する子供等」で語られる子どもたちの姿が、「大陸新報」に掲載された「中国人の子弟と共に」のそれと重なる。

○・二二―二四)で、「日華両国」の文化人の間に交わされる「愛情」や「倫理」を根底に据えた「戦ふ文化」を育てることを主張していることが挙げられようし⁽⁴⁶⁾、一九四四年三月の上海市政研究会編『上海の文化』刊行(華中鉄道株式会社総裁室弘報室発行)に際しても、前年の夏に解散した上海市政研究会事務局の肩書をもって序文を書き、この書物が「大東亜の建設的課題を擔つて現地文化界の第一線に活動しつゝ、ある方々の高い良識と創造的努力との成果の一端」であることを告げている。

だが、そんな彼が、中日文化協会上海分会発行の中国語機関誌「文協」に美術評論を寄せたりしていた中国人画家陳抱一の個展を見に行き、それについての印象を語った「清澄な画境―陳抱一の個展を觀て」(『大陸新報』一九四四・一一・二三)のトーンの方は、やや趣が違ふ。たとえば、その文中には「深々と雪に埋れた貧しい家の戸口に一籠の炭を持て訪ひ來た客」を描いた「雪中送炭」と題する画を取り上げて、「今の上海の街の中でいつも黙つてゐる陳抱一さんはこんな画材を抱いて静かに筆を運んでをられるのである。そして私はこの画を拝見したとき、陳抱一さんがなぜ黙りこくつてゐるゝのか、あの眼がいつでもなぜあんなにも澄んでゐるのがわかつたやうに思はれた」という感想が書き込まれているのである【図版4】。

芸術に対する作者の愛情の所在をこのように言い当てている言葉は、ある意味では「中日文協改組に際して 吾々の仕事」において、租界還付以前の上海が「欧米」による「商品見本的文化」の出店の觀を呈していたことを批判している立場と相通ずるところがあるかもしれない。また、陳抱一の個展会場が、大陸新報社が同社屋内に「大東亜文化建設」の一端を担うべく付設していた大陸画廊⁽⁴⁷⁾であつたことも、宗主国の地位にあつた日本に対する中国文化人がとつた〈抵抗／屈服〉という観点から見た場合、問題を複雑化する契機も孕んでいる。さらに、時期は少し遡るが一九四〇年から四二年にかけて上海画廊の経営の任にあたっていた清野比佐美が、上海の動乱に巻き込まれて常に被

害者の立場に置かれてきたことを「怒りに震」え「涕泣して尽きることなく語」っていった陳抱一夫妻の様子を回想している⁽⁴⁸⁾ことも想起すれば、林の文章はそういう悲慘な現実から遊離した美化された存在としての陳抱一像を提示しているとも言える。

ただ、それらの点を差し引いてもなお、林広吉の陳抱一評は一つの真実感を伝えてくると思う。それは陳抱一の「黙りこくつてゐる」姿が、彼が属していた中国人洋画家団体の名称「黙社」と符合するといった美術史上の知識⁽⁴⁹⁾を持ち出してから後付け的な思考に拠るものではない。そうではなくて、澄んだ目をして、一人ひっそりと画布に向かう画家の姿が、「逞しい精神」をもつて「現実の熾烈な歴史の中から生れ出てくる文化」を育てていこうとする威ただけかな姿勢とは対置される性格を示しており、かつそのような「戦ふ文化」が第一義的な価値を持つと一方では主張する人物（＝林）が、そうした範疇に入ってこないものに対して胸襟を開いているからである。

「清澄な画境―陳抱一の個展を観て」が陳抱一の〈私〉性に注目したのは、室伏クララ訳による張愛玲の「爐餘録」や星野芳樹の中国人子弟との交流を伝える随筆が掲載されてからすでに半年近くが経過した一九四四年十一月のことである。この前後、「大陸新報」が頻繁に取り上げた現地の文学文化動向に関わる出来事といえ、その一つはいうまでもなく第三回大東亜文学者大会、もう一つは映画「狼火は上海に揚る」の上海・南京での一斉封切りの件であった。大会に参加した「日・満・華」の代表や、映画制作に携わった中国人が出席する座談会⁽⁵⁰⁾が開かれ、日華合作の機運の盛り上がりを鳴り物入りで伝える言説は後を絶たない。加えて日中文化交流という言葉の悠長な響きに業を煮やしてか、「現地文化総武装」、「女子挺身日記」と題されたコラムが登場してくるのもこの頃だ。そうした記事の氾濫の中で、この展覧会評が放ったかすかなきらめきも、やはりそんなに軽くない意味を持つはずだ。

註

(1) 「資料紹介」邦字新聞「大陸新報」瞥見」(『昭和文学研究』第39集 一九九九年九月)。

(2) 「朝日新聞の中国侵略」(『諸君』二〇〇四・一一) 及びそれに新たな資料を加えて刊行された『朝日新聞の中国侵略』(文藝春秋 二〇一一・一二)。

(3) 用紙節減のため一九四五年三月以降二ページ体制になる前まで、文芸記事は主として第四面に掲載。

(4) たとえば一九四三年九月の紙面でそのことが確かめられる。

(5) 「方々にある」を連載(一九四二・一二・二二)～(三・三一)した草野心平は、汪兆銘南京国民政府宣伝部顧問として一九四〇年八月以降南京及び上海での活動を展開、小説連載前は日語版「中日文化」の編集に携わっている。「風も緑に」を連載(一九四一・一二・一八)～(七・三二)した日比野士朗は、一九三七年に応召、第二次上海事変の戦闘に加納部隊の一伍長として加わり、呉淞クリークの渡河戦で負傷した。「呉淞クリーク」(『中央公論』一九三九・二、同年七月、中央公論社より単行本化)は、その時の体験をもとにした小説。「生命の鳶」を連載(一九四一・一二・一)～(一九四二・一・三二)した多田裕計は、「長江デルタ」(『大陸往来』一九四一・三)で第一三回芥川賞を受賞、「大陸新報」紙上でもそのことを報じられた作家。上海青壮年团组织委員の任にも就いていた。アジア太平洋戦争開戦前後の上海を舞台とする小説『新世界』(大都書房 一九四三・七)には、その折の体験が盛り込まれている。

(6) たとえば、一九四四年二月一七日の「大陸新報」に載った次回連載小説に関する社告は、「南方の凱歌と建設の雄叫びとを連日の紙上にこだませしめつ、あゝる大江賢次の「南十字星」が終わった後、今度は「少し趣を変へ」て「文壇の鬼才」高見順の「銀座近情」を掲載する予定であることを、「上海の友人達に銀座の近情をたよりする気持で私はこの小説を書きたいと思つてゐる」という「作者の言葉」も添えて告げている。

(7) たとえば、一九四三年二月九日の「朝日新聞」では、この日が夏目漱石の命日であることにちなんで「則天去私」が載るのだが、同日の「大陸新報」の「けふの座右銘」として挙げられるのは「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」(孟子)であり、「則天去私」が紹介されるのは二月二十四日である。また、「朝日新聞」で「則天去私」の解説の筆をとるのは村岡花子だが、「大陸新報」では上海第二高女教諭稲家弘という違いもある。すなわち、村岡も含め保田與重郎、徳富蘇峰、高嶋米峰ら、国民座右銘の選定委員・審査委員・選定顧問となった錚々たるメンバーが「朝日新聞」では解説の筆を執っていくのに対して、「大陸新報」側の座右銘の解説者は、現地教育関係者を中心として構成されている。

る。また、「国民座石銘」の掲載は情報局の通達によりどの新聞メディアにも要請されていたのではないかと考えて内地一般紙の一部も調査してみたところ、「朝日新聞」(大阪版)に「国民座石銘」が載りはじめた一九四三年一〇月の「毎日新聞」(大阪版)では、「決戦下の我信条」と題して各界の代表者の言葉を載せるコラムはあったが、「国民座石銘」の掲載はなかった。そのことからしても朝日新聞社と大陸新報社との固有のつながりが確認できると思う。

- (8) 大陸新報社刊行の年次報告書『大陸年鑑 昭和十九年版』(一九四三・一二)の記述によれば、「華中興亜報国会」は昭和一八(一九四三)年七月に結成された「中南支興亜報国会」が、八月初旬の広東の日本大使館事務所新設に伴い改称されたもの。なお、「中南支興亜報国会」は、昭和十七年一月に発足した上海総力報国会が、上海時局婦人会、上海興亜会とともに発展的に解消して成立したものと説明されている。

- (9) 虹口海甯路の銀映座が中国映画封切館に転向したのが一九四四年二月のこと。また、「中国参戦一周年記念」イベントとして「日華提携講演と映画の夕」が中華電影聯合公司・中華劇場株式会社主催、上海日本人劇場組合後援のもとに開かれ、日本語字幕解説付の「萬世流芳」が国際劇場で上映されたのも一九四四年一月のことである。

- (10) 島田政雄『四十年目の証言』(窓の会 一九九〇・一)中の「第五章 暗い時代に」参照。

- (11) 「街頭書店」と題する島田政雄の文章をもつて一九四三年二月二〇日から始まった「大陸文化評」欄には、それ以後在滬作家の肩書を持つ史田良、華中鉄道弘報室勤務の秋田正男ら、幾人かの現地邦人の書き手による文章も載るのだが、島田の登場する回数が計二五回と群を抜いている。

- (12) 「大陸文化評」高茵氏の論(一九四三・一二・二七)で島田が紹介する高茵「民族主義文化再出発」中の説明によれば、「何等の信念もなく、日本側に媚び、民衆を欺き、政府を欺いてまるで投機者のやう」な行動をとる中国文化人を「文化飯」を食う連中だと呼ぶ。

- (13) 「大陸文化評」とは別に一九四四年一月一〇日から一二日にかけての「大陸新報」に三回にわたって連載された「民族文化の確立」。

- (14) 「大陸文化評」からいくつか事例を挙げれば、「怪談」(一九四四・一・二六)、「予且記」(同・二・三)「天堂哀歌」(同・二・一五)、などがそれに該当する。これらの文中に示された批判的言説を「怪談」に例をとって具体的に紹介すると、「万象」一二月号に沈寂が発表した小説中に出てくる「鬼気迫るやうな夜の大草原で貧に迫られた二人の男が柩を掘り起

し死体から金目のものを剥ぎ取つてゐる場面が、こうした行爲に出なければならぬ男達の「社会的な或は人間的な過程」への洞察を欠いたまま書かれているため、作品全体が「怪談」にはなり得ても、「文学」の域にまでは達していないことを指摘している。

- (15) 「回力球」(一九四四・一・三〇)、「翻訳について」(同・二・二四) がそれに該当。前者の評で島田は、「雑誌」一月号が洛川の「回力球」を「報告文学」と銘打って掲載したことに対して、同じ作者の他の作品と比してこれはせいぜい「教訓小説」と呼ぶべきものであつて、「生々とした作者の生活精神が脈搏つてゐる」報告文学の範疇には入らないのではないかと疑義を呈している。

- (16) 須田禎一著『独絃のペン 交響のペン—ジャーナリスト30年—』(勁草書房 一九六九・二) 参照。

註(16)と同じ。「日本人の文武官僚や商社員たちとだけ交際するのは上海へ来た甲斐がない」と考えて、虹口ではなくフランス租界のキャセイ・マンションの一室に居を構えた須田は、震旦大学の女子学生の清芬から北京語を学んだ。「清川草介」はこの恩師の名に因んで用いたペンネームである。

- (18) 清川草介「[現地評壇] 蛻変によせて」(『大陸新報』夕刊 一九四三・一一・三〇)。

- (19) 清川草介「さめのこまかさ」(『大陸新報』一九四四・二・二六)。

- (20) 島田政雄「代表の検討」(『大陸新報』一九四四・一・一六)や、清川草介「話劇『家』を観て(下)」(『大陸新報』一九四三・一二・六) がそれにあたる。

- (21) 上海自然科学研究所所員小宮義孝の筆名。小宮はこの二人のほかに、とくに予且の作品の翻訳を精力的に行っている。

- (22) 阿部知二は一九四三年一月に来滬、二月には中日文化協会上海分会の幹旋で上海大学および上海滬江書院で講演を行っている。

- (23) 高橋良三の役職名は「中日文協事務所の新陣容」(『大陸新報』夕刊 一九四三・一〇・六)に拠った。なお高橋は中国渡航前に制作した新短歌や詩論を収めた『詩・論集 日常の詩』(詩園社 一九四〇・一〇)を「高木喬」という筆名で刊行しているほか、現地文学サークル長江文学会をリードし、その機関誌「長江文学」の編輯・発行の任にあたった。

- (24) 一九四三年二月二十四日の「大陸新報」に掲載された島田の「大陸文化評」のタイトルである。

- (25) 「出版に際して」(『上海文学—春季作品—』(一九四三・四・二三 創刊号)。

アポリアとしての〈正しき〉中国理解への道

(26) 「月山、猛田両氏に上海文学賞授与」(『大陸新報』一九四四・一・二三)中の言葉。なお、記事タイトル中にある「上海文学賞」は同記事本文によれば、「内山完造氏の提唱と賞金の提供」によって設けられたもの。

(27) 「上海文学―冬春作品―」(一九四四・四)の「編輯記」中の言葉。

(28) 註(27)と同じ。

(29) ちなみにその次に注目しているのが、若い書き手を中心として中国人側の文壇に生じた変化。島田政雄の「大陸文化評」と内容としては対応するこの事象に言及している部分の方が、多くの頁を割いている。

(30) 本文で以下数行にわたる叙述は、木田隆文「日本統治下上海の文学的グレーゾーン―長江文学会／上海文学研究会の動向から」(池内輝雄・木村一信・竹松良明・土屋忍編「外地」)日本語文学への射程」(『双文社出版 二〇一四年三月)中の論旨と一部重複することをお断りしておく。

(31) 註(27)と同じ。

(32) 編輯所は上海多倫路八八の上海文学研究会となっているがこれは同人猛田章(武田芳一)の住所。なお、清水投鬼についても一言触れておくと、彼の長兄登之は独立美術協会の設立にも与った画家で、戦前からしばしば上海にも立ち寄り、大陸新報社が一九四二年五月に西華徳路大陸新報社隣大陸会館内に開設、四三年九月に同社社屋の移転に伴い黄浦灘路で新たに開設した大陸画廊で、その月に個展を開催している。一方、次兄の薫三は上海東亜同文書院の教員を経て外務省に勤務、南京日本大使館書記官となった。また、この号以降「上海文学」は確認されているかぎりでは一九四四年二月と一九四五年五月に刊行されるが、二誌とも発行所を大陸新報社とする方針は維持されている。ただし投鬼は編輯兼発行人ではなくなっている。彼の自筆「回想録」(一九八〇年七月記)によれば、それは一九四四年三月に彼が現地召集を受け、広西省をはじめ中南支七省にわたる戦線に赴いたためである。代わって大陸新報社編集局華文局長(「新申報」主筆)を務め、一九四五年の時点では「大陸新報」の編輯兼発行人ともなる日高清磨瑛の名前が記載される。

(33) 陶晶孫「俺にふざけるな―魯迅に代りて―」(一九四四・一・三一)。章克標「魯迅乎―島田政雄氏に與ふ」(一九四四・一・二二)。島田政雄「民族作家「魯迅」―章克標氏に答ふ」(同・一・二八、二九)。たとえば陶晶孫の場合、彼はその直前に寄せた「文学の隘路」(一九四四・一・二九)で、島田の「大陸文化評」を通じて「中国文学の諸様相を霞網で残らず捕へて紹介」する動きに賛同する意を示しているのだが、「俺にふざけるな―魯迅に代りて―」の方では、魯迅精神

を受け継ぎつつ「魯迅に於て欠けてゐた所の理想と希望と光明とを付け加へなければならぬ」と考える自分にとつて、「民族文学の確立」の中で島田が見せた魯迅評価の姿勢は「魯迅の遺骸を掘り出し、その功績を祭り上げるだけのものに映るという見解を示した。

- (34) 新たな民族文学を可能とするために島田が関心を向けるのは、文学形式上の問題、すなわちいわゆる八股文的な弊害を今日の作家はいかにして克服していくかといった問題である。

- (35) 島田政雄『四十年目の証言』中の「第六章 ささやかな抵抗」参照。

- (36) 美琪大戲院、滬光大戲院、国泰大戲院などが挙げられている。

- (37) 「淪陷区」上海の恋する女たち―張愛玲と室伏クララ、そして李香蘭』（四方田犬彦編『李香蘭と東アジア』（東京大学出版会 二〇〇一・一二）所収。

- (38) 「民族主義文学論（四）」の末尾には「本名呉誠之、元『雜誌』主編、現在新中国編訳社（岩井公館内）に籍あり」という哲非の紹介がある。なお註37の藤井論文は、彼が中共地下黨員であつた旨も記している。

- (39) 「田村俊子を繞る詩人たち（Ⅱ）」（「歷程」一九六八・一一）の中で、一九四四年七月に上海で創刊された詩誌「亜細亜」の第二号に登載をみた作として川鍋は言及。未見。

- (40) 池田みち子作「上海二世」は一九四一年一月号、「邦人商社」は一九四四年三月号の「三田文学」にそれぞれ掲載。後者の末尾には「これは二百枚の中篇小説の一部である」という断り書きがあるが、戦後『日本小説』（一九四九・一）に掲載された「国際都市」がそれに該当する。なお池田みち子のこれらの作品については、拙稿「明朗上海に刺さった小さな棘―池田みち子の『上海もの』をめぐる」（『アジア遊学』167 二〇一三・八）を参照されたい。

- (41) 一九四四年三月八日の「大陸新報」に掲載された「表彰に輝く日華親善の尖兵」と題する記事がその旨を伝えている。この中で星野とともに表彰された上海在留邦人は、頓宮寛、内山完造、山田純三郎、山岸多嘉子の四人である。

- (42) 「学園に日華提携 廉潔の偉人、葉澄衷」の劇化 容海日語学校学芸会」（『大陸新報』一九四三・四・一二）。

- (43) 「中国の子弟と共に（中）」（一九四四・二・一八）。

- (44) 「中国の子弟と共に（上）」（一九四四・二・一七）。

- (45) 「学園に日華提携 廉潔の偉人、葉澄衷」の劇化 容海日語学校学芸会」で紹介された星野の談話中にも、読み手である

アポリアとしての〈正しき〉中国理解への道

上海居留日本人の関心をこの〈優良邦人〉の偉業に向けさせようとする記事全体の基調に肩透かしを食わせるかのような「別に日本人の方々に対する希望と言ってはありませんが」といった言葉が混じっている。加えて、『上海露地裏の人々』の方になると、この日語劇を制作、上演した背景には、星野が葉澄衷の事績を受け継ぐ澄衷中学校の経営難を同校校長王震とともに訴えても、それへの適切な対応を示さない「日本軍官の控制下にあつた」た教育行政に対する「痛憤」のあつたことが記されている。

(46) 後者の「吾々の仕事」は先述した中日文化協会上海分会の中国語機関誌「文協」創刊号（中華民国三二年＝一九四三年一月）にも、「我們的工作」と題して転載された。

註32参照。

(47) 「私的絵画の裏面史（最終回）前幕のおわり」〔みづゑ〕915 一九八一・六）参照。

(48) 上海百年文化史編纂委員会『上海百年文化史第二巻中』（上海科学技術文献出版社 二〇〇二・五）中の「第九章 中国画的百年軌跡」（江宏撰）参照。

(49) 高見順・火野葦平・林榕・路易士・山田清三郎・石軍・池田克己・草野心平出席の「大東亜文学者大会に臨んで 日・満

・華代表座談会（本社主催）（一九四四・一一・一九）や、岳楓・胡心霊（演出者）、梅熹・巖俊・李麗華・王丹鳳（俳優）等が出席した「日華合作映画に出演して 中国映画人座談会（本社主催）」（一九四四・九・一〇）が挙げられる。

（おおし たけひこ・関西学院大学文学部教授）